

オウトウシヨウジョウバエの日本と欧米における生態と防除の研究事例

コーネル大学昆虫学科・ニューヨーク州立農業試験場

三井化学アグロ株式会社農業化学研究所

東京農工大学大学院農学研究院

せ
瀬
きん
な
なか
仲

と
戸
じょう
城
い
井

まさ
昌
ひろ
寛
ま

のり
宣
とし
俊
ど
か

はじめに

オウトウシヨウジョウバエ (*Drosophila suzukii*) は、オウトウやブルーベリー等の果実に寄生する害虫である。本種は、オス成虫の翅に、特徴的な斑点があり英名では、Spotted Wing *Drosophila* (SWD) と呼ばれる (図-1)。メスの産卵管がギザギザのノコギリ状になっており熟れる前の固い果実に産卵することができる (図-2)。本種に産卵された果実は、黒褐色に腐敗し、果実中に蛆が混入するため、生食用の果実では商品価値がなくなる (図-3)。

本種は、1916年に日本の本州ではじめて記載され、1930年代に山梨県職員だった神沢恒夫によりその生物学の特徴について詳細な研究が行われた (神沢, 1939)。日本国内における本種による被害の報告例としては、徳島県のヤマモモ、福島県のオウトウ、ブルーベリーおよびブドウ等がある。特に2002年には千葉県本更津市で栽培されているブルーベリーが本種の被害にあい問題になった。

また、2008年ごろ、原産地である東アジア (日本、韓国、中国等) より欧州や北米に侵入し、現在もこれらの諸国で甚大な被害を及ぼしている。欧米において急速に重要害虫となった本種の生態・侵入状況と防除に関する最近の研究動向を概説する。詳しい総説として CINI et al. (2012), LEE, et al. (2011 a), WALSH et al. (2011) がよくまとめられているので参照してほしい。

I オウトウシヨウジョウバエの生態

1 生活史と寄主植物

本種は温暖な気候を好み、約1～2週間で卵から成虫となる (神沢, 1939)。成虫の寿命は3～9週間とされ、メスはその間200～600個の卵を寄主果実に生む。日本では年間10～13世代が確認され、成虫で越冬する。

福島県での本種の寄主植物は、果実の熟期順に、ソメ



図-1 オウトウシヨウジョウバエ雄成虫

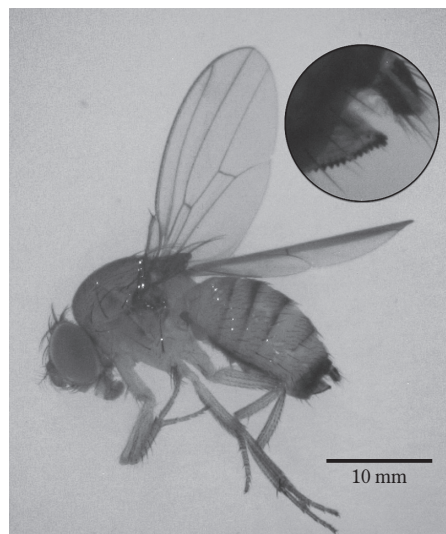


図-2 オウトウシヨウジョウバエ雌成虫 (円内は産卵管の拡大図)

Ecology and Management of *Drosophila suzukii* in Japan, America and Europe. Masanori SETO, Hirotoishi KINJO and Madoka NAKAI

(キーワード: オウトウシヨウジョウバエ, 侵入害虫, 果樹害虫)